

突然のスコールが来て

突然のスコールが来て、すべてが寸断される。

日本の真夏日を思わせる快晴の空の下、騒々しくまたどこか南国らしくゆったりと繰り広げられていた人々の営みは、バケツをひっくりかえたようなスコールに中断されて、小さな傘や、雨ガッパや、バス停の小さな屋根の下にうづくまっつて、それぞれの物思いをじっと困っているかのようだ。

突然のスコールに寸断された街角にリキシヤはなすすべもなく停車し、男たちは高架道路の下に立ちつくして、スコールをただ眺めている。

スコールは南の街、南寧（ナンニン）を洗う。繁華街の自転車置き場を洗う。背の高いユーカーリの並木道を洗う。道路を洗う。『南寧建設有限公司』の黄色いカンバンを洗う。道路に漂う排気ガスを洗う。馬車を洗う。オートバイを洗う。人いきれを洗う。

スコールはすべてを寸断し、すべてを洗う。雨宿りをする自転車の鉄錆も濡れて、つかの間その用途を忘却する。裏街の赤レンガはスコールに打たれて息をつき、朝陽路（チャオヤンルー）のマンゴーは雨宿りの人々のかたわらにそびえながら肩をなで下ろしている。

突然のスコールが爆音のような音をたてて都市を打つとき、爆音とともに洗い流してしまうのは、人々の営み、人々の間を微かに漂い少しずつ堆積する体温に似た微熱なのだ。スコールは人々の営みを寸断し、会話を断ち切り、例えばひとつの意志として人々につかの間君臨する。

やがてひとときのあと、厚い雲の間から光が差してきて、スコールは急速に衰える。都市も人も、人々の営みも、すべてが一新されたかのような情景をひと呼吸したあと、何事もなかったかのようになごりのスコールの中を人々は歩き始める。

温帯の雨はこのように情景を一新し、あるいは洗い流してしまうことはない。それは人々の営みを寸断し、洗うのではなく、人々の営みを濡らすのだ。雨上がりのあともそれは去らない、それは人々の営みを濡らし、営みの奥に滲み入り、営みを発酵させる。

温帯の雨はやはり人々の交通を途絶えさせるが、視線を寸断することはない。温帯の雨を眺める人々の視線は焦点を結ばない。雨は焦点距離をつかませることはなく、視線の裏側へと滲み入る。温帯の雨は意志しない人々の視線は雨を眺めながら、内向する。つまり、温帯の雨は眺める人に漠然とした内省を強い、そのようにして人々の営みを発酵させるのだ。

スコールは内省を呼ばない。それはただはるかに暴力的に寸断する。ス

コールははるかに一元的に視線をつかむ。温帯の雨の不定形な距離感はそのこにはない。

スコールは断ち切り、つかみ取り、支配し、そして潔く去っていく。やがて物陰から、繁華街の歩道のアーケードから、市場の軒下から首を出した人々は、再び差し始めた日差しを受けながら、何事もなかったかのようにしゃべり始めるのだ。

五月二一日（金）午後三時過ぎ。

突然のスコールに足止めをくらって、だだっ広い民族大道に面した区科技館の玄関で雨宿り。地図で調べてみると、民族大道の向う側は民族広場ということ建物らしきものはなく、本当に何もないところなのだ。ただ、どしや降りのスコールと、スコールが跳ね上げる水しぶきが小波のように沸き立っている民族大道。ときおり路線バスが通りを走り過ぎていくが、バス停まで走るあいだに濡れねずみになってしまいうだろう。おまけにさつき間違えて博物館のひとつ手前のバス停で降りてしまったのだけれども、そのバス停には雨を避けるための屋根などないのだ。

ホテルを出るときに傘を忘れたことを、僕は少し後悔する。しかし今は台風のような激しい雨だけでも、南国のスコールはすぐに行ってしまうだろう。しばらくはここで雨宿りをして、小降りになったら博物館まで歩いていくことにしよう。それまでは刘三姐（中国煙草、一元五角。広西南寧巻烟廠出品）でも一服しながら、ここまでの道程をたどりなおすことにしよう。

それにしても面白い名前の煙草だ。刘三姉妹という意味だろうか。もしかしたら南寧の歴史か伝説に関係があるのかもしれないが。

※

昨日の列車（一五〇二桂林発、二二〇三五南寧着、九一次特快列車）は快適だった。途中停車駅は柳州だけ。特快というのは列車番号が二桁のもので、日本の特急にあたる。もちろん硬座、とはいえ普通列車や急行とは違って、座席にはシートカバーがかけられ、おまけに空調がよく効いていて涼しかった。

発車直後には桂林観光記念のハンカチが配られた。『GUILIN CHINA VISITING MEMORIO』と印刷してある。さすがに桂林、観光列車なのだ。

座席の隣は二五才くらいの女性。ちよつとファッションナブルで、ヘッドフォンステレオを聞きながら、すまして雑誌を眺めていた。（ヘッドフォ

ンステレオは中国ではちよつと先端的なおしゃれなのかもしれない。) 窓の外にはときおり桂林のなごりのように思われるカルスト山がよつきりとそびえて、目をくぎ付けにする。

通路をへだてた座席からはときおり少し訛りのある日本語が耳に飛び込んでくる。興味を引かれて耳を傾けていると、どうやら台湾人の実業家らしい。その向かいは老年の日本人夫婦。台湾人の男性が日本人夫婦の旅を案内しているらしい。

ふとしたきつかけで会話が治まる。

台湾人の実業家は七〇年万博にも出展したと言い、現在は南寧に農場を持って手広く商いをしているらしい。その日本語はおそらく植民地時代からの筋金入りだ。神戸から来たという日本人夫婦は定年退職した教授夫婦といった印象のだが、少しもうろくしたような感じで、会話がうまくかみあわない。もしかしたら戦時中に中国にいたのかもしれないが、中国は汚い、中国人はダメ、という位置関係が固着してしまっているかのようで、少し挨拶したあとは会話にはならないのだった。そんな日本の老人の言葉を台湾人は適当にあしらいつつ気長につきあっているとでもいった風だった。

晩ごはんは車内販売の弁当(五元)。いつものように発泡スチロールの弁当箱にごはんを入れて、おかずをどかつと乗せてあるだけだ。

隣の若い女性も同じ弁当を食べていたのだけれども、食べおわって、さでどうするのだろうと見ていると、テーブルに置いた僕の弁当殻とふたと一緒にしてたまたま通りかかった服務員に手渡す。日本人の目を気にしたのかどうかは、知らない。

それから片言の会話。彼女がバッグから取り出した封筒には『日中友好協会』の印刷がしてあった。

日本からははるか、中国の南の果て(ベトナム国境までは二二〇キロ)南寧行きの列車のその一角にいろいなる日本がいあわせていたのだ。僕は少し不思議な気がする。

いつのまにか日も暮れ落ちて、窓の外は真つ暗な闇で、闇の中を特快列車は終点、南寧に向けてひた走っていた。

列車が南寧に到着したのは、午後九時半頃だった。ほぼ六時間半の列車の旅にいささか疲れて、駅前広場に降り立った。

駅前広場から南に向けて朝陽路が走っていて、それが南寧のメインストリート。朝陽路を二キロ程下ったところ、市政府脇に南寧飯店があるはずだった。ガイドブックの地図をもう一度確認して、朝陽路を歩き始めた。すでに夜も遅く、果たしてうまくホテルにもぐり込むことができるかど

うか不安を抱えながら。

夜も一〇時に近いというのに、朝陽路には人があふれていた。サイドカー付きのオートバイで客待ちをする人。リキシャにもたれている人。屋台で何かを食べている人。散歩する人。何をするともなく、ただ立っている人。日本の繁華街に比べるとずっと暗い大通りの歩道に、人々はひしめきうごめいていた。

長旅で疲れていたし、ホテルが決まっていない不安もあったので、重たい荷物をかっいでひたすら南寧飯店を目指したのだった。中心地の繁華はすぐにとだえて、人通りもなく寂しい歩道を一心に歩いた。二〇分ほどで南寧飯店に到着。

ロビーには中国語が飛び交っていた。外国人用のホテルというわけではもちろんなく、高級ホテルというわけでもないが、中国人用の大きなホテルという感じだった。掲示を見ると、一泊は五〇元くらい。カウンターにもたれて先客の中国人と従業員とのやり取りを聞いていると、どうやら満員らしい。それでもあきらめずに中国人は従業員に食いがついているようだったけれども、話にならんとでもいうように従業員はこちらに向き直る。

「何か用か？」

「部屋はありますか？」

「メイヨー」

「ヨンジャンピンカンへ行け！」

「どこにありますか？」

従業員は方向を手で差し示しながら、行き順を説明するのだけれども、僕にはだいたいの方角しか分からない。ロビーでガイドブック(九二年版)を調べてみると邕江賓館というのはなく、たぶん邕江飯店として紹介されているホテルのことなのだろうと思われた。邕江飯店は部屋が約五〇元、ドミトリーは五元と紹介されている。

従業員が示した方角と、ガイドブックの地図に従って、朝陽路をさらに南へと歩いていった。朝陽路の果ては高架式のロータリーになっていて、そこからさらに民族大道と邕江を渡る江南路へと続く。邕江賓館(飯店)はそのロータリーのあたり、邕江大橋付近にあるはずだった。しかし夜ということもあり、高架下をぐるぐると歩きまわっているうちに僕は方向を見失ってしまった。どうしてもホテルらしい建物を見つけることができない。すがるような思いで、たまたま高架付近で暇そうにしているリキシャの男に声をかけた。

「ヨンジャンピンカンを知っているか」

「もちろん」

「いくら？」

「ウークアイ（五元）」

あつという間に邕江賓館着。門前にはタクシーがずらりと並び、こちらの方は見るからに外国人用高級ホテルという印象だ。いささか気後れしながらロビーに入って、フロントで尋ねると、一泊なんと二六〇元。多人房（ドミトリ）はメイヨー。あわてて、

「もつと安い飯店を紹介してください」

とお願いと、女性の職員は電話でいくつかのホテルを当ってくれたのだけれども、やっぱりメイヨー。あとから来た中国人も二六〇元の部屋しかないと言われて困った様子を見せていたから、ことさら外国人に対して意地悪をしているわけでもないようだった。

支配人らしき職員は、明日は一〇〇元の部屋が空くからそこへ移ればいい、と言う。どうしようもないのでチェックインすることにした。

とりあえず一泊分の支払いをしなければならぬのだけれども、財布を調べてみるとFECは一〇〇元くらいしかない。支配人に人民幣で支払ってもいいか、と尋ねると、人民幣ならば三九〇元だと言う。入園以来ようやくにして、僕はFECと人民幣の交換レートを知ることになった。一〇〇元（FEC）に対して一五〇元（人民幣）。これまでずいぶん寛大な交換をしてきたものだ。

人民幣で支払うのはやめにして（人民幣を手に入れるのに苦労したことが頭を過ぎったからだ）日本円の一万円を保証金に入れて、明日銀行で両替をしてから支払うことにした。

支配人は一万円札を見て、珍しいものを見るような顔をしながら透かしを確認した。大都市とはいえ、たぶん経済圏が違うのだと、僕は思う。上海や北京など、北部沿海の都市とは違って、日本との直接の結びつきは少なく、むしろ広東、香港、そしてベトナムや東南アジアとの交流の方がずっと強いのだろう。

なにはともあれ、このようにして僕は中国经济の一端を知る。ガイドブックのホテル料金が当てにならないのは、なにもガイドブックのせいではない。たかが一年で、端的に言って、ホテル代は二倍になっているのだ。そしてたかが一年でホテルは改築され、ドミトリはなくなつて、高級ホテルへと変貌しているというわけだ。とんでもないインフレーション（東欧諸国に比べると平穏なものだけでも）と、加熱した建設ラッシュ。それが真っ先に出会う開放経済の現実なのだ。

そして僕は南寧が果てでも何でも無いということを知る。経済は果てを食いつくす。それは果てをつねに侵食し、フロンティアを前へ前へと押し進める。国境もつかのまの果てに過ぎない。南寧は、香港、台湾、広東、

東南アジアを連結する華南経済圏のひとつの前進基地だ。南寧から南西すぐに独自の開放経済を推し進めるベトナムがあり、南東すぐには現在沸騰する建設ラッシュで沸き立っている海南島がある。

この経済の現実、その普遍性の前には『果て』を求める僕の心情などはたわいのない日本人の情緒、後向きの郷愁にしか過ぎないのかもしれない。

旅人は奥地へと向かう。まるで拡大し、侵食する経済との競争をするかのように。雲南の小さな村へと、国境地帯へと、開放されたかと思うとすぐに閉鎖されてしまうチベットへと。そこにはおそらく経済の普遍性、日々の現実に飲みつくされた僕らが置き忘れてきた何かがあるような気がするからだ。旅人を『果て』へ『果て』へと誘ってやまないもの、それはもしかしたら郷愁なのかもしれない。だが、郷愁に陥ったとたんに、旅は僕という現実の宙空に安定し、現実と無葛藤に並存してしまうことになる。内的な現実との拮抗、葛藤を失った旅は、弛緩し緊張感を喪失する。旅は観光という平面に寝そべることになるだろう。中国四〇〇〇年の歴史（漢詩的情感）をなぞることにそれ自体としては意味がないのと両様に、それを水平的に置き換えた実体としての『果て』にもまたそれ自体としてはそんなに意味があるわけではないのだ。『果て』を求めるとき、僕はとても危うい場所で思考しているのだと思う。

到着早々の南寧で、僕は漠然と求めていた『果て』を裏切られる。ただ僕は『果て』に何を求めていたのだろう。いままでの中国とは違う何か？ 何かエキゾチックなもの？ 中国の中心とは異なる文化、風習あるいは風土？ 見たこともない風景？ それとも様々な要因による交通の困難？ もちろん僕はこれらすべてを求めていた。『果て』を求める思いに突き動かされて、もちろん僕は行くのだ。

だが『果て』は、ついにつかみえないものではないのだろうか。あるいは、つかんだと思った瞬間にかき消えてしまうもの、幻のようなものではないのか。コロンプスのつかんだ『果て』が、彼と西洋の思い込みに過ぎなかったように。おそらくどこにも実体としての『果て』などは存在しないのだ。それでも強引に『果て』を納得し、納得を押しつけるとき、旅は侵略に変貌する。何も武力のことを言っているわけではない。文化的な侵略だってありうるのだし、個人的な侵略的納得というものもまたありうるのだ。『果て』の実体化は『中心』の実体化を生む。そして旅は手段として安定する。『果て』という目的に至るための過程として納得されるのだ。そして、その瞬間に旅はかき消える。『果て』も旅も、完成した瞬間にかき消えるのだ。そしてかき消えたあともなおそれを保存する感情が郷愁に他ならない。旅は、危うい試みだ。

次の日、つまり今朝、邕江賓館のツインルームに目覚めて、とりあえず僕は火車站へと向かった。とりあえず次の交通機関を確保すること。中国をひとり旅行するには欠かせない儀式だ。

これまでの旅行であらかじめ考えていた日程よりも大幅に遅れてしまったので、次の目的地、昆明までは飛行機を利用しようかと思っただ。中国民航の售票処は火車站の付近にあるはずだった。

朝の朝陽路を歩いていると、さすがに広西壮族自治区の区都だけあって、メインストリートには立派な建物が並び、所々には現代的な高層建築が顔を覗かせている。しかし降り注ぐ日差しは南国のもので、都市の風景もどことなく南国の匂いを漂わせている。道を行く女性の中には、ベトナムの農夫が登場する映画などでお目にかかる傘を小型にしたような円錐形の帽子をかぶっている人がいて、ベトナムがすぐ近くなのだということをおぼせる。また街路にはときおり黒い民族衣装に身を包んだ男たちや女たちがいて、独特のナイフやアクセサリーを売っている。

(広西壮族自治区はその名のとおりに、人口一二〇〇万人という中国最大の少数民族、壮族の自治区なのだけでも、漢民族による支配と同化の歴史は二〇〇〇年にも及び、南寧などの都市ではほとんど見分けがつかないほど同化している。もちろん都市部を離れたところでは昔ながらの暮らしを残し、そのような人々が都会に出稼ぎに来て物売りなどをしているのだろう。)

途中、中国銀行の支店があったので、二万円をFECに両替し、火車站へ。南寧の地図を買い(一・五元)候車室の一角で朝昼兼用のごはんを食べた。プラスチックの丼一杯のごはんは肉汁をぶっかけたようなもので、二・五元。

朝陽路へ戻って、民航售票処を覗いてみた。しかし事務所風の售票処の壁に掲げられた運航表を調べてみると、昆明行きは毎週水曜の一日だけしかないのだった。今日は金曜で、来週の水曜までここにいることはできないので、飛行機を利用することはあきらめた。

朝陽路をとぼとぼ南下する。とりあえずは、お昼に近くなってきたので高いホテルの部屋をチェックアウトしよう、と考えていた。もしかして南寧飯店が空いていたらそこに移ろう。それがダメなら、邕江賓館の一〇〇元の部屋に換えてもらおう、と。

途中、火車站とホテルとの中間あたりに、歩道に面して朝陽花園という公園があった。見ると、平日の午前というのに人であふれている。公園のベンチに腰を下ろしていたり、日差しを避けて木陰でぼんやりしていた

り、あるいは植え込みの囲いに雀のように座り込んでおしゃべりをしてりしている。退職した老人のたまり場というわけではなく、働き盛りの男たちばかりだ。どことなくどんよりとした無気力な雰囲気が公園には漂い、仕事にあぶれた男たちなのだと思はれる。あるいは仕事を求めて都会に出てきたものの、働き口が見つからないのかも知れない。

そういえば、この街には歩道の物売りが多い。歩道の靴磨きや、わずかばかりの衣服を歩道に広げて客待ちをする物売り。あるいは陸橋に敷いたビニールシートにわずかな日用雑貨を並べている人、物干し竿のような棒に旅行鞆をぶら下げて、歩道を行ったり来たりする男。民族衣裳に身を包んで、壮族のナイフを売る男、壮族の装身具を両手に持つてぼんやりとした視線を道行く人に投げかける女。あるいは数本のトウモロコシを鍋に並べて、大切なもののようにしゃもじでお湯をすくいかけている女。その頭上はるかには、塔のようにそびえる広西電子商場の近代的なビルディングが、ひたすらさらに高みをあおいでいるかのようだ。

公園からしばらく南下して、昨夜の南平飯店を覗いてみたが、あいかわらず『満』。仕方がないので邕江賓館に戻って、服務員に言つて一〇〇元の部屋と交換してもらおう。一〇〇元の部屋は現在工事中の旧館内部にあり、一方で工事を進めながら使用できる部屋を客用に開放しているのだ。部屋そのものはやはり古いが、ツインルームでバス、トイレがあり、それでも十分過ぎるほどだ。

飛行機での移動をあきらめて、さてこれからどうしようか、と考えながら時刻表をめぐっていると、二二二次の列車で、南寧発成都行きがあった。これに乗ると貴陽（クエイヤン）で乗り換えて昆明（クンミン）に向かうことになるが、考えようによっては貴陽に立ち寄ることもできる。そこで今後の方針を、南寧―貴陽―昆明、というように変更した。南寧発一三・五四、貴陽着一〇・三二。

ホテルをあとにして再び火車站へ。ホテルの近辺にはバス停がなかった。邕江大橋を歩いて渡り、向こう岸のバス停へと向かった。邕江は長江ほどではないが黄色い流れを運ぶ大河で、向こう岸にはすでに都会の面影はない。だだっ広い江南路がその両側にユーカリの丈高いこんもりとした並木を従えてどこまでも伸びているだけだ。視界をさえぎる建物もなく、ユーカリの緑と白い雲が泳ぐ空だけ。思わずこのままどこまでも道を歩いていきたくなる。

火車站には、候車室の隣に售票処の建物があった。ちょうど昼の休憩時間と重なったこともあって、ほとんどの窓口は閉ざされていた。閉ざされた窓口の前にも行列、開いている窓口にはもつと行列。行列と行列のあい

だには、列車の時刻を確認する人たちや、横から窓口に首を突っ込んで何やら大声で服務員に問いかける人たちや、あわよくば横入りしようとする連中や、あるいはうさんくさい商売（切符の転売や代理購入）に精を出す連中がひしめいている。

長時間の列車の旅になるのでできれば臥舖（寝台）が欲しかったのだが、掲示を見ると、二二二次の臥舖（硬臥）は9舗だけが南寧の割当てらしくてとても貰えそうになかった。臥舖の窓口は二時間ほどあとでないと開かないし、その前にはすでに三〇人ほどが行列をつくっていた。

硬座の切符を売る長距離の窓口はひとつだけが開いていた。窓口の上部には各次の列車の状況を示す札が掲げてあった。その中には二二二次の列車についての札があり、明天『無号』と示されていた。その札を目にしたときには、僕はちよつと目の前が暗くなった。『無』だけならば切符が売り切れたということなのだろうが、『無号』だから列車そのものが何らかの都合で運沐になるということなのかもしれない。おまけに長距離のその窓口は開いている唯一の窓口ということもあって、行列は延々と続いて售票処の建物の外にまではみ出しているのだ。どのように判断しても由々しき状況だった。行列に並ばなくては切符を買えないし、窓口にたどり着いたとしても「没有（メイヨー）」のひと言で追い払われる可能性が高い。いっそのこと外国人の特権を使ってやろうかとも考えたのだけれども、外国人用の窓口も二時間ほどあとでないと開かない。

あれこれ考えているあいだにも行列はどんどん伸びていく。考えていても事態は打開できないので、とにかく行列の後尾についた。もしも「明天」がダメならば、「后天（ホーテン、明後日）」でもいいか、と考えながら。

行列は遅々として進まず、一時間ほど並んでようやく售票処の前階段にたどり着いた。それからまた一時間ほど立ちつづけて、ようやく窓口の混乱に突入。

「明天、二二二次、到貴陽！」

五〇元札を突き出しながら、大声で叫んだ。

不安に反して、三五元の貴陽行き硬座切符は、おつりとともに事務的に投げ返された。

切符を手にして窓口の混乱を抜け出したとき、何かがスコンと胸元を落した。『無号』の掲示があり、買えないのではないかと不安を抱えながら二時間近くも行列に並んだあげくのことだ。スコンと底が抜けて、わだかまっていた不安が一瞬にして胸から体流れ落ちて、そのついでに腰の力も抜けてしまった。へなへなと、售票処前の階段に座り込んだのだ。それにしても明天『無号』の掲示はいったい何だったのだろう。

ふと見上げると、昨夜桂林からの列車で隣になった女性が駅前広場からこちらの方に歩いてくる。階段に座り込んでいる僕に気付いて声をかける。

「どこへ行くの？」

「クエイヤン」

「桂林（クエイリン）ですか？」

買ったばかりの切符をポケットから取り出して、見せながら、

「貴陽（クエイヤン）」

ともう一度僕は繰り返した。切符を持つ手が微かにふるえた。

「じゃあね」

と言いながら、切符をいちべつしたあと、彼女は售票処の中へと入っていった。

なにはともあれ貴陽行き切符を手に入れることができ、ほっとひと息。駅前の露店でジュースを買って飲んでみると、ポツリポツリと雨が降り始めた。ついさっきまではとても良い天気で、少し動いただけでも汗が吹き出すような暑さだったので、ちょうど良いお湿りだと、気にもしないうで駅前から博物館の方へ行く路線バスに乗り込んだ。

雨はいったんは降り止んだようだったが、民族大道の西端付近で乗換えのバスを待っている頃から急に強くなり、すぐにバケツをひっくりかえしたような豪雨になった。とにかく博物館まで行ってしまうかと思って、折よくやって来たバスに乗り、間違えてひとつ手前の科技馆前で降りてしまい、あわてて科技馆の軒下に駆け込んだというわけだ。

※

スコールは弱くなりかけたかと思うと再び激しくなり、僕はなかなかこの軒下を出ていくきっかけをつかめない。

三〇分ほどそのようにしていただろうか、ずぶ濡れになったランニングシャツをしぼっていたただひとりの雨宿り仲間の男も意を決したかのように降りしきるスコールの中へと出ていった。それを見て、僕も博物館までバス停ひとつ分の距離を走ることにする。

民族大道脇の並木の木陰を飛び移るようにして、ぬかるみに足を取られないように気を使いながら走った。それでも区博物館の軒下に飛び込んだときにはずぶ濡れになってしまって、髪の毛からしたたる雨を手で拭いながら、退屈そうにスコールを眺めているような服従員からチケットを買って（一元）人気のない博物館に入館した。

博物館は一階が閉鎖されていて、二階には自治区近辺に居住する少数民族を紹介する展示があった。壮族の他には、侗族、瑶族、苗族など十以上の少数民族があり、代表的なくつかの少数民族について、その民族衣裳、機織などの用具、祭の様式、楽器などが展示してある。

それぞれの民族はもちろん言葉も異なり、独自の文化を持っているのだけれども、僕にはむしろある種の共通性、民俗の根底を流れるある種の共通分母のようなものが感じられた。そしてその共通分母というものは、今は日本という都市でアパート暮らしをし、土というものから断ち切られた暮らしをしている僕の中にも確かにある。すでに忘れられて久しいけれども、どこか奥深いところに、確かに共鳴しあうものがある。それはたぶん稲作の民、農耕を土台としてその上に暮らしの文化というものを組み立ててきた民としての共通分母のようなものかもしれない。あるいはもしかしたら稲作以前にまでもさかのぼるものなのかもしれない。誰かがある少数民族を指差して、「これがお前の祖先なのだ。お前がそこから学び、伝え、育み、やがて忘れていったお前自身なのだ」と言われたとしても、納得できるような気がした。

僕は巨大な笙の前に立ちつくす。祭の情景を再現するように様々な楽器が並べられ、その中に大小の笙があったのだが、大きいものは人の身長以上もある。物干し竿を並べたような笙は、そのつくりは素朴なものだけれども、確かに日本の雅楽で用いられる笙と同種のものだ。確かにつながっている。そしてふと、僕はこのような文化を持つ少数民族が展示のように今もすこやかな暮らしをしているのだろうか、気にかかる。

展示をひとまわり見ているあいだに、スクールは去り、陽が差し始めた。博物館二階の窓から眺めると、民族文物苑の濡れた建物や水たまりは日差しを反射し、降りしやるスクールに閉ざされていたあらゆる存在が再び陽の光に解放されていくようだった。何かが一新されたかのような情景を、遠足のように見える子供たちが声を上げながら行き交っていた。

いったん博物館を出て、民族文物苑に入場した。民族文物苑は庭園になっている。どこどころに少数民族の伝統的な建築物が再現、展示されている。侗族風雨橋、侗族鼓楼、壮楼、壮族作坊、苗族吊橋、瑶族竹楼など。

遠足らしい子供たちと民族文物苑をまわりながら、このようにして少数民族の伝統的な建築物が再現、保存されているということは、逆に少数民族の伝統的な暮らしというものが風化し、変化していつているということを表わしているのではないかと僕は思う。もちろん伝統が革新され、暮らし方が変化するということは、それ自体としては何ら悪いことではない。しかし一方で、僕は南寧の市街地の朝陽花園の仕事にあぶれた人たちがふきだまっているかのような情景や、ナイフや装身具を売る民族衣

裳に身を包んだ人たち、あるいは路上の小商いに日々の暮らしをしのいでいるかのような人々の姿を思う。伝統的な暮らしはその求心力を失い、若い者たちは都会へと拡散する。それは日本でも過疎としておなじみの情景だけれども、ここではそれが民族性の風化と重なっているように思えた。もちろん、通過する者としての印象にしか過ぎないのだけれども。

博物館前から再び路線バスに乗って、六路の終点南湖へ。南湖公園に入場し、南湖にかけられた橋を渡って対岸へ。そこには烈士記念館があり、その前広場には烈士記念像が立てられていた。午後五時過ぎ。広場には水たまりが広がり、通り過ぎたスクールのなごりをとどめていた。日も傾いて、気持ちの良い風が流れていた。広場脇のベンチに腰を下ろして、刘三姐を一服した。

僕はふと、昨年台湾を旅行したときのことを思い出していた。本当は昨年の夏にこの旅行をするはずだったのだが、仕事の都合で延期になり、中国旅行の予行演習とでもいった気持ちで一過間の台湾旅行をしたのだ。

八月、真夏の台湾をその暑さにあえぎながら旅行し、その日は花蓮（ホアリエン）。旅社を出てからまっすぐに海岸に出て、砂浜でしばらくひとりで遊んだあと、花蓮港へ。それから川沿いの小道をずっとさかのぼり、やがて大通りと交差したところに忠烈祠の中国風の建物が見えた。橋を渡って、忠烈祠の階段を登っていった。人影は少なく、その内部はがらんとしていた。とても暑くて、僕は建物の影に腰を下ろして、ぐったりと休憩したのだ。

ともに国や民族のために戦い、戦死した者たちだった。しかしその戦いのベクトルは逆向きに対抗している。一方は共産党、そしてもう一方は国民党の兵士たちなのだ。国共内戦では、共産党が農民の支持を獲得し、勝利し、国民党は海の向こうへ、台湾へと追い落された。それから現在まで、両者はそれぞれの国家の英雄たちをしのびながら、海峡を隔ててにらみ合っている。だが僕がいま何とはなしに物思っているのは、二つの対するベクトルのことではなくて、むしろそのような対抗の土台のことなのだ。

それから雨の日。台東（タイトン）のバスターミナルで高雄（カオシヨ）ン）行きのバスを待っていたとき、いかにも少数民族という顔立ちの家族が、まわりの人々と比べるとみすばらしい身なりをして、同じくバス待ちをしていた。赤ん坊を背負った母親は、むずかるまだ小さな子供たちに売店で駄菓子を買って与えた。都会の情景や雑踏（それは僕の目には田舎町のバスターミナルに過ぎなかったけれども）に当惑したような彼らの表情。

いかにも山の民という印象の父親の風雨にさらされたような顔。

共産党も国民党も少数民族の側から見ると、支配を争っているに過ぎない。彼らはどこからかやって来て支配し、あるいは「解放」するのだ。少数民族は山へ追われ、あるいは街の片隅にひっそりと生き延び、あるいは観光資源として回収される。長らく国民党の軍事独裁が続いた台湾に比べると、中国ではこの壮族自治区など自治がある程度認められて、支配はよりスマートだと言える。しかし、チベットにおける強圧的な支配に見られるように、民族的な主体性は許されてはいない。それに漢民族と他の少数民族とのあいだの圧倒的な経済的、文化的な実力差の前には対等の民族的主体性は育ちようもなく、保護と同化の関係が優勢にならざるをえない。そして、保護と強圧とはコインの裏表なのだ。

長江沿いの都市では何の違和感も感じなかった烈士像が、ここ南寧では妙にひっかかるのだった。

再び市街地へと戻り、朝陽路に面した食堂で夕食。『快餐』という大きな看板が出ていたその店は、食堂というよりも小さなファーストフードのレストランという印象で、若い女性たちで賑わっていた。いくつかの定食のようなものの中から、ひとつを選ぶ。鶏モモと野菜とゆで卵とごはんとスープで六・五元。

帰り道、歩道に出ていた露店でシャツを買った。土色のワイシャツでこれも六・五元。

夕暮れの朝陽路をバスや乗用車にまじって、たくさんのオートバイが走っていた。南寧はこれまでのどの街にもましてオートバイの多い街だ。半分はサイドカー付き、サイドカーに荷物や人に乗せて運ぶ。半分は普通のオートバイで、タクシーよりも手軽でバスよりも小回りのきく交通手段なのだろう。オートバイの解放性は南寧の街の風土にとっても合っているような気がした。

南寧飯店の近くの雑貨屋で啤酒（ビール）を買い込む。雑貨屋の主人はお金を受け取りながら、

「ピンを返してくれたら、五角を返すからね」

と、丁寧に説明してくれた。

邕江賓館に戻り、旧館の工事現場を通って、ホテルの部屋へ。

スターTV（香港資本の衛星放送）を見ながら、言葉もなく、静かに僕は酔っていく。いつも何か、何か大切なものを思い残しているという微かな悔いに似た感情を味わいながら、静かに僕は酔っていく。

（これまでの地方では気のついた限りスターTVを見たことはなかった。だいたい中央電視台の二局とその地方の放送だけ。テレビの放送にも

南寧が広東、香港との結び付きが強いということが感じられる。もつとも衛星放送の受信ができるのはホテルなどの施設や金持ちに限られてはいらぬだろうが。

※

五月二三日(日)午前。邕江賓館を出て、邕江大橋を南に渡り、昨日火車站へ行くために乗った一路の路線バスでその反対方向、南の方へ向かう。終点は曲がりくねった邕江の南岸近く、亭子というバス停。

午後一三時五四分発の列車に乗ることになっていたのであまり時間がなかったのだけれども、何かをし残したような、何か見なければならぬものを見落しているような気がして、時間までホテルでゆつくりとしている気にはなれなかった。かといつてその何かは僕には分かっているわけではなくて、ただやみくもに路線バスを終点まで乗ったのだった。

ユーカリの並木が豊かに生い茂る江南路をバスは南下し、やがて亭洪路という通りを東に折れて、邕江付近で終点。バス停付近には何もなく、二、三軒の掘建小屋のような食堂が店を出していた。付近に市場があるらしく様々な農産物や肉や魚などの臭いがこんぜんと混じりあって漂っていた。付近には市場の残骸ともいえる野菜屑やへしゃげた箱などが散らばっていた。亭洪路はすぐに果てて、亭江路という道が南へと続く。田舎道だった。ときおり土煙を上げながらトラックが通った。右手には水田のような養殖池があり、胸まであるゴム長をはいた男が池に入っていた。道路脇には洗面器状の入れ物に稚魚を入れて並べてあった。メダカのような魚や、もう少し大きめの魚。

どこまでも果てがないような気がして、僕はきびすを返した。亭子から今度は反対側の小道へと入っていく。朽ちかけたレンガを剥き出しにしたような家屋に沿って歩いていくと、邕江の支流らしい川があり、川を渡る橋がかかっていた。自転車に乗った人たちが橋を渡っていく。しばらくほんやりと川の情景を眺めたあと、僕は再び亭子から路線バスに乗った。市街地へと向かうバスに揺られ、何かの工場のただっ広い敷地を眺めながら、ふと言葉が胸を過ぎった。

「きびすを返すとき、そこに果ては生まれるのだ」と。

邕江賓館への帰りに、街中の小さな食堂で肉うどんを食べた。暑いので人々は食堂の外に出したベンチで食べていたが、ベンチがいっぱいだったので小さな食堂の中で汗をかきながら熱い肉うどんを食べた(一・一元)。(そのときは僕は少し細いうどんだと思っていたのだけれども、あと

から考えるとそれは小麦ではなくて、米粉からつくった米線（ミーシェン）という食べ物だったようだ。）

ホテルでしばらく休憩し、昼前にチェックアウト。突然のようにまたスコールが来た。ロビーのソファアーに腰を下ろして、小降りになるのを待った。そして火車站へ。

列車に乗る前に、候車室の一角で昨日と同じ井のような快餐。長旅に備えて、ミネラルウォーターと刘三姐を買い込んだ。

列車の硬座車両は通路の片側に二人掛け座席が向かいあい、反対側には三人掛けの座席が向かいあっている。切符は三人掛けの座席の通路側だったが、途中若い女の子たちに頼まれて座席を交換した。どうやらグループ旅行で座席が離れてしまったようなのだった。移った先は二人掛けの座席の通路側。

列車は、長江下流域のただっ広い平原地帯とはかなり趣の違う山がちな風景を走っていく。目的地の貴陽は海拔一〇七一メートル、雲貴高原の都市だ。

（中国の地形をその高度によっておおざっぱに捉えると、西から東の方へと下っていく三層の階段のようになっている。いちばん高いのは西南部、チベット自治区と青海省の青蔵高原（チベットは中国語では西蔵）で平均高度は四〇〇〇メートルを越える。次には北東部の黒竜江省の大興安嶺山脈と中南部、雲南、貴州省の雲貴高原を結ぶ一帯で、海拔一〇〇〇メートルから二〇〇〇メートルくらいの高原や山地、あるいは山間の盆地である。最後にこの北東から南西に連なる高原地帯の東側には、海拔一〇〇〇メートル以下の丘陵や二〇〇メートル以下の平野部が広がっている。）

晩飯は車内販売の弁当（五元）。

やがて夜も更けて、乗客たちは思い思いの格好で眠りについた。前の座席の人のあいだに足を投げ出したり、座席の前に突き出した小さなテーブルにうつぶせたり。一泊程度の旅だからか、さすがに座席の下にもぐり込んだり、網棚に横になったりというのは見かけなかったが、思わずそうしたくなるほど硬座で眠るのはしんどいのだ。（しかし網棚は狭くて怖いし、座席の下は煙草の吸殻や痰やその他あらゆるゴミの吹溜りで、とてもそこにもぐり込む気にはなれない。）小さなテーブルにうつぶせようにもすでに窓際の人占領しているし、前の座席にむりやり足をこじ入れるのも気がひけた。背もたれはほとんど垂直で固い。昼間にすることがないままにうつらうつらしたのも効いて、なかなか眠ることができなかった。通路に足を投げ出して、腕を組んで頭をたれたり、肘掛に肘を立てて、頭

を支えたりして、断片的な眠りをそれでもなんとかまえようとした。さすがに明け方には小さなテーブルに頭をこじ入れるようにして、いつのまにか眠っていたのだけでも。